令和４年度

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集

（瀬戸内市優秀賞受賞作品）

©瀬戸内市

瀬戸内市教育委員会

岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会

はじめに

公益社団法人岡山県青少年育成県民会議及び岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会では、家庭の役割、家族のあり方など、「明るい家庭づくり」をテーマとした作文を募集しており、家庭教育等の重要性について意識の向上に努めております。

令和４年度は、瀬戸内市内で８２４点の応募作品があり、その中から瀬戸内市の優秀賞１４点、優良賞２５点及び佳作賞７４点を選定しました。

この文集「ほがらか家族」は、瀬戸内市の優秀賞作品を掲載したものです。コロナ禍で、家族の絆の強さが、一層感じられる作品が寄せられました。この文集が、家庭の教育力の向上の一助となり、青少年の健全育成につながることを心から願っております。

令和５年２月

瀬戸内市教育委員会　教育長　東南　信行
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会　会　長　神坂　俊規

瀬戸内市優秀賞受賞者一覧

〔小学生の部〕

題　　名	所　　属	氏　　名
がんばったこと	行幸小学校　１年	木村天梨
まん中	邑久小学校　２年	安原彰吾
松本家の日じょう	邑久小学校　３年	松本晴輝
スタンプカード	邑久小学校　４年	森上直美
家のお仕事マスター大作戦	邑久小学校　５年	河合優奈
帰らない父親	国府小学校　６年	岸本太一

〔中学生の部〕

引き継がれた思い	長船中学校　１年	横山文乃
私の祖母	邑久中学校　２年	佐藤芙季
父との握手	長船中学校　３年	林　雄大

〔保護者の部〕

おばあちゃん入院	行幸小学校	三木真紀
「明るい家庭の為に取り組んだ事」	行幸小学校	津々幸子
家族で協力して	行幸小学校	竹本美穂
我が家の子育て	行幸小学校	竹原智子
夏の落とし物	行幸小学校	野田真美

小学生の部

岡山県佳作賞　がんばったこと

行幸小学校　１年　木村　天梨

わたしが一ねん生になったばかりのしがつに、おかあさんがにゅういんしました。わたしは、びょういんのちゅうしゃじょうのくるまのなかで、しらされました。とつぜんあえなくなるときいて、さみしくてないてしましました。おとうさんが、
「おとうさんとあんじとてんりで、がんばろう。」
と、いいました。このひから、おかあさんがいない生かつがはじまりました。

おとうさんは、おしごとがおわったあと、これまでおかあさんがしていたりょうりやせんたくをがんばっていました。おしごとがおわったあとのりょうりやせんたくは、たいへんそうでした。あさは、わたしのかみのけをむすんでくれました。おとうさんは、かみのけをむすぶことがにがてで、
「ひとつくくりしかできなくて、ごめんね。」
と、いっていました。おかあさんみたいにかわいいむすびかたはできないけれど、おとうさんがいっしょうけんめいむすんでくれるひとつくくりも、わたしはすきです。

おねえちゃんは、ちゅうがっこうやぶかつどうがおやすみのとき、わたしのめんどうをみてくれました。おとうさんがつかれてねてしまったときは、わたしといっしょにねてくれました。

わたしががんばったことは、がっこうのじゅんびをきちんとすることと、おとうさんのおてつだいです。おじいちゃんやおばあちゃんもきょうりょくしてくれたので、さみしさにまけずに、がんばれました。

ごがつに、おかあさんがたいいんしました。おかあさんがかえってきて、とてもうれしかったです。おとうさんも、おねえちゃんも、わたしも、にこにこえがおになりました。やっぱり、かぞくよにんそろうのが、いちばんです。

岡山県優良賞　まん中

邑久小学校　２年　安原　彰吾

ぼくは三姉弟のまん中で、姉と妹がいる。

姉はしっかりもので、パパやママからたよりにされている。二さいの妹はだれにでもニコニコとして、みんなをえ顔にする。

そんなぼくは、まん中はつらいと思うことがある。ぼくがゲームをしようとしたら、
「もう出かけるから、ゲームをするな！」
とえらそうに姉におこられる。ジャンケンでゲームのじゅん番をきめるとき、姉はジャンケンがよわいので話し合いできめることがある。すると、話がうまい姉が先にゲームをすることになる。

ぼくが本を読んでいると、妹がかならずうばいにくる。いやだと言ったら、きょうりゅうみたいに、
「きゃー！」

とないておこる。ママは、大じなものならかさなくていいと言ってくれるけれど、けっきょくわたしている。
「お姉ちゃんと妹がいてたのしいね。」
と言われるけれど、えらそうにおこられたり、がまんをしてゆずったり、しゃべりでまけたり、大へんなことが多いと分かってほしい。
　でも、やっぱり姉はたよりになるし、妹はかわいい。夏休みにコロナで学どうへ行けなくなった時、姉とるす番をした。一日のながれを考えてくれたり、ぼくがさみしくてないた時そばにいてくれたりした。うるさい時もあるけれど、姉はたよりになってやさしい。
　妹は、ぼくがおなかがいたくてねていると、
「いたい、とんでけ。」
と心ぱいしてくれる。妹はすごい力をもっていて、いたいのが本当にきえるのだ。え顔で一生けんめい大きな絵本をもってきて、読んでとおねがいしてくる妹は、読んであげたくなっちゃうくらいかわいくて大すきだ。
　まん中は大へんだけど、毎日たのしい。こんなまん中でもいいかも、とぼくは思う。

岡山県佳作賞

松本家の日じょう

邑久小学校　３年　松本　晴輝

「バシッ。バシッ。」
　午後六時。今日もミットの音が鳴りひびく。ぼくの家族は四人。父、母、姉、そしてぼく。ぼくと姉は、空手を習っている。はじめの音は毎日の家でのれん習ふうけいだ。
「かまえを下げるな。動け。」
組手中、父と母の大きな声がする。あせが出て、いきが上がってきた。しんどいのと、いたいのとでぼくはなきそうになる。ぼくの相手をするのは、二さい上の姉だ。姉は空手になるとめちゃくちゃ強い。とくいわざは前げり。それをかわしてぼくはパンチとミドルキックをだす。
「ピー。やめ。」
父が止める。一回の組手は一分三十秒。これが意外と長い。いきが上がったぼくたちに父と母がアドバイスする。
「けりが弱い。」
「動きを止めるな。」
「もう一本。」
これを十本ほどくり返す。ミットうちやシャドーも合わせて二時間ほど、毎日れん習している。
　空手のれん習が終われば、姉は歌やダンスをひろうしてくれる。これがわらえるほど下手くそだけどニコニコとやさしい姉にもどる。
　父も母も空手が終わるとやさしくなる。母はいつもごはんを作ってくれて、毎日ぼくをだきしめる。はずかしいから、外ではやめてねといつもちゅういしているくらいだ。
　父はたまにゲームをしてくれて、しあいの時にはいつもうんてんしてくれる。みんな空手が終わるとやさしくなるから、いつもこうだったらいいのにと思う。
「やめたかったらやめていいよ。」
ぼくの母はいつもこう言う。周りの友だちは、ならいごとをやめさせてくれないと言うけれど、ぼくの母はいつでもやめていいと言う。なんでかなっと思って聞くと、「いたい思いをするのも、かっ

てうれしい思いをするのもはるきだから。やめたいなら止めないし、やるなら全力でおうえんする。」
って。
「うん。ぼくはいたいし、こわいし、いやな時もあるけど、かちたいし、強くなりたい。だから、ぼくは今日もれん習するんだ。」
　これがぼくの日じょう。これがぼくの家族。

岡山県佳作賞

スタンプカード

邑久小学校　４年　森上　直美

　「ただいま。」
「おかえり、お父さん。」
今年の三月三十一日、お父さんが、たんしんふにん先の神奈川県から、この岡山県に帰って来た。お父さんは、私が小学二年生に進級すると同時に、神奈川県へたんしんふにんでいなくなってしまった。ちょうどそのころ、新がたコロナウイルス感せんしょうがはやり始めたころだった。
「本当にこんなじょうきょうで神奈川県へ行って大じょうぶなのかな？」家族や親せきのみんなが不安な気持ちでいっぱいだったが、お父さんは
「仕事だから仕方ないんだよ。」
と言って、行ってしまった。
　お父さんとの遠きょり生活が始まり、学校が休みの日は、テレビ電話で話をして、今週あった出来事や楽しかった事などを話していた。そんなある日、いつものようにお父さんと、テレビ電話で話をしていた時、一まいの紙を見て思いついた。
「今度、スタンプカードを作っても良い？　お父さんが帰って来た時に、私がおしえてあげるから。」
と聞くと、お父さんは、
「良いアイデアだね！さっそく作ってもらおうかな。」
と言ってくれた。私は、お父さんが帰って来た日におせるよう、スタンプカードを作った。「お父さん、よろこんでくれるかな。」と、ワクワクしていた。
　お父さんがたんしんふにん後、初めて帰って来ることが出来たのは、その年の年末だった。まさか、こんなに帰れなくなるとは、家族のだれも思っていなかった。そして私は、すぐにじゅんびしていたスタンプカードに、記ねんすべき一こ目のスタンプをおした。
「ありがとう。スタンプカード、大切にするよ。」
と言って、お父さんはとてもよろこんでくれた。
　お父さんは、帰って来ても、家の中でも、マスクや消どくをして、どこにも出かけず、みんなにめいわくをかけないように気をつかってくれた。それでも、直せつお父さんに会えた事がとてもうれしかった。外には出られないけど、一緒にテレビを見たり、ゲームをしたりして遊んだ。
　お父さんが私たちも家から神奈川県へ帰ってしまう時、「またね、行ってらっしゃい。」と、え顔で見送った。げん関のドアがしまり、お父さんを乗せたお母さんの車が出発して、車の音が聞こえなくなった後、私はとても悲しくて、なみだが止まらなかった。でも、「今度帰って来た時に、どのスタンプをおしてあげようかな。」
と考えるように気持ちを切りかえることにした。

たんしんふにん二年目が終わろうとしたある日、お父さんが予定より一年早く岡山県にもどって来ることになった。私は、
「スタンプをおしてあげるね。」
とお父さんに言って最後のスタンプをおした。
スタンプカードは終わったけど、今でもお父さんは、大切に持ち歩いてくれている。
今度は何のスタンプカードにしようかな？

岡山県佳作賞

家のお仕事マスター大作戦

邑久小学校　５年　河合　優奈

「そんなするの！？　親がすればいいじゃん。」
正直、そう思った。家庭科の授業で家庭の役割を見直した時、友達は、料理や洗たく物、皿洗いなど、色々なことをしていたのだ。一方、私は何もしていない。発表することがなくて「妹の面どうを見ている。」とノートに書いた。本当はけんかばかりで面どうなんて見ていない。どうして、友達は色々な仕事をしているのだろうかと、気になった。
そこでこの夏休み「家のお仕事マスター大作戦」を実行した。毎日、一つ以上の家の仕事をする。そして、ノートにやり方や感想、かかった時間などをまとめるのだ。おふろそうじや洗たく物たたみなど、予想通りの仕事もあった。
しかし、知らない仕事もあった。例えば、ごみ出しをするためには、家中にあるごみを集めないといけないことだ。ごみ箱はいっぱいあるし、それにくさい。袋のつけかえもあり、意外と時間がかかった。こんな仕事があるなんて知らなかった。洗たく物干しもそうだ。干すためには、洗たく機から取り出さなければいけない。取り出す作業は衣類の種類に分け、広げながら出す。その作業が意外とめんどうくさい。でも、必要な仕事だ。
もっと知らないこともあった。それは、終わった後のそう快感だ。例えば、ぞうきんがけ。やった後はとてつもなくつかれた。でも歩いたときびっくりした。ふいた所は、ごみがなくピッカピカで、気持ちがよかった。「また、やろうかな。」と思うことができた。
それからチャーハン作り。時間がかかって大変だった。でも、お皿に盛りつけたとき、おわんに入れたチャーハンをひっくり返して開けた瞬間、妹が、
「すごーい。」
と言った。ほこらしい気持ちになった。きらきらした目が、「ありがとう。」と言っているようでうれしかった。妹とお母さんにほめてもらって、「作ってよかった。」と思えた。
この大作戦を実行する前は、「家の仕事なんて、子どもがすることじゃない。親がすることだ。」と思っていた。でも、何度も仕事をしていくと、かかる時間が短くなり、だれにも聞かずに一人でできるようになった。そうすると、心の中に少しずつ、「してもいいかな。」「楽しいかも。」という気持ちが芽生えてきた。
しかも、私が進んでしていたら、妹が手伝ってくれたり、私の水とうを準備してくれたり、他の仕事をしてくれたりしていた。しなければならない仕事がへると、とても助かった。それに、一人でするより二人でしたほうが楽しかった。私が仕事を手伝ったとき、お母さんも同じ気持ちなのかもしれない。
私はこの大作戦のおかげで、少し変われた。次からは、お母さんがしている姿を見ている私ではなく、自分から進んで仕事をする私になりたい。これからも大作戦を続けていく。

岡山県優良賞

帰らない父親

国府小学校　６年　岸本　太一

ぼくの父親は、家に帰って来ない。べつに死んだわけではない。

父親は、ぼくが幼ち園の年中の時からずっと、宮城県気仙沼市にいる。東日本大震災の復興工事をするためだ。でも、今までずっと帰って来なかったわけではない。年に三、四回は帰って来た。

ぼくは、父親のことがきらいだ。いつもこわい顔をしているし、一緒に遊んでくれるのも数知れている。でも、母が言うには、ふつうの顔らしい。ぼくが何よりもつらかったのは、友達と休日の話をする時だ。友達が家族みんなで・・・、お父さんとお母さんと・・・と話すのを聞くたび、父親は、どうしてぼくを置いて遠くへ行ってしまうのだろうと不思議で腹が立った。そう思うたびに母は、

「お父さんも、本当は一緒に過ごしたいんだよ。」

と言った。そんなことは分かっている。

父親が宮城県に行っている間、母が一人でぼくと妹の世話をしてくれた。けんかをすると怒る時もあった。わがままを言うと、全力でこたえてくれた。だから、ぼくは、出来るだけ妹と仲良くするようにがんばった。でも、父親が宮城県から帰って来ると、

「あいかと仲良くしとったか。」

と聞いてきた。また、行く時には、

「あいかと仲良くするようにな。」

と言った。ぼくは、そう言われるたび、信用されてないんだなとがっかりした。祖父は、

「がんばっとるな、いい子じゃな。」

と言ってほめてくれる。この言葉だけが元気づけてくれた。でも、きらいな父親を少しだけほこりに思ったことがある。五年生の総合の授業で、震災や津波の学習をした時だ。十一年前の大震災は、０才だったから何も知らない。でも、大変なことが起きたことを初めて知った。そして父親は、その町をなおすために、遠い所で働いている。ぼくの中のイライラが少しほこりに変わった。

母が言うには、復興支援に行った最初の年は、一年のうち、二十日も家にいなかったらしい。震災から十一年が経ち、父親が家にいる時間が少しずつ増えてきた今、父親に思うことがある。家族と一緒に過ごしたかったと言うのなら、八年分、今から取り返せばいいのではないかと。さびしかった気持ちを分かってほしい。過ぎた時間は、もどらない。だから、これからも前だけ向いて生きていく。

ぼくの父親は、幼ち園の年中から、八年間、宮城県にいる。たとえ一緒に過ごしたとしても、きっと楽しいことだけではない。だけどうれしいことも、楽しいことも、悲しいことも父親とともにできなかった。だから、これから、父親との八年分を取り返していきたい。

実は今、父親とはなればなれだったからこそ、一緒に過ごせる幸せを感じている。

中学生の部

岡山県佳作賞

引き継がれた思い

長船中学校　１年　横山　文乃

私が夏休みに入ってすぐ、曽祖母は、百一歳の誕生日を病院で迎えた。少し前から、食欲がなくなってしまい病院に入院していた。去年の誕生日には、元気に何でも食べて、皆で賑やかに誕生日会をしたのに、一人で誕生日とは寂しいだろうなと思った。コロナ禍で面会もできず、私は曽祖母に、会えない日が続いた。私は曽祖母にずっと会いたかった。それは私だけではなかった。家族も同じだった。でも、会えないまま、曽祖母は、他界してしまった。

夏になると、我が家においしいブドウが届く。このブドウは、祖父が丹精込めて作ったブドウだ。もともとこのブドウの木を植えたのは、私の曽祖父・母だそうだ。祖父は、そのブドウの木を引き継いで、ブドウを栽培している。曽祖父は、私が生まれる前に病気で亡くなっているので、私は会ったことがない。曽祖母はブドウができると喜んで嬉しそうに食べていた。祖父が、ブドウ作りを続けるのは曽祖母に喜んでもらいたいのも理由の一つだと思う。

ブドウ作りは、袋掛けや収穫だけでなく、ブドウの実がなっていない時でもせん定をしたり、肥料を散布したり、ビニールを張ったり、いろいろな作業が必要だ。祖父は、主に一人で作業をしているが、ビニール張りや、遠くからホースを引っ張ってきて水をやる作業は、一人では大変だ。祖母は、手の手術を受け、ブドウの栽培を手伝うことが難しくなってしまった。大変な作業がある時は、私たち家族や従姉弟の家族も手伝いに行く。コロナ禍で、旅行にもなかなか行けないので、手伝いに行く回数も増えた。

ある時、私の家族と従姉弟の家族が手伝いに来て半分遊びながら手伝っていると母が、

「私も君たちの頃、兄弟や従姉弟と手伝いをしながら遊んでいたよ。ブドウがどんどん大きくなって色が変わって食べられるようになるのが楽しみだったよ。私のおじいちゃんはいつも一番なりのブドウを孫に食べさせてくれたよ。」

と言った。私は、

「今の私と一緒だね。」

と言った。祖父もおいしい果物や野菜をいつも孫の私たちに先に食べさせてくれる。続いては母、

「私が小さい頃はブドウを食べるために作っていると思っていたけど、考えるとそれだけではなかったなあ。」

と言った。私は、それがどういうことなのか分からなかったが、曽祖母が他界してから気づいた。祖父が、ブドウ作りを続けるのは、曽祖母に喜んでもらうため、曽祖父・母がしてきたことを受け継ぐためだと思った。

この夏、私と姉は、それぞれの学校の吹奏楽部で、コンクールに向けて頑張っていた。そんな時に曽祖母の体調が悪くなっていることを知り、家族で話し合いをした。

「もし、曽祖母が亡くなって、お葬式とコンクールが重なってしまってもコンクールに行って頑張って来てね。もしかしたら、応援には行けないかもしれないけど、精一杯吹いてきてね。」

と母に言われた。私は、お葬式に参加して今までの「ありがとう」を伝えることの方が大事だと思っているから、

「もし、コンクールと重なっても、お葬式に行くよ。」
と言った。姉は、今回は、自分しかアルトクラリネットを吹かないので、すごく悩んでいた。私も悩んだ。
「大きいおばあちゃんは、きっと吹奏楽部の一員として頑張る姿を喜んでくれるよ。」
と両親に言われた。よく考えるとお葬式に行かなくても、曽祖母に「ありがとう」を伝えることは、できる。その話し合いの時、私は思わず泣いてしまった。何だか曽祖母の葬式が近づいてしまうのではないかと不安になった。だから、とにかく私は、コンクールまで、必死にトランペットを練習した。私は、もし、お葬式に行けなくてもコンクールで曽祖母のことを思って演奏することにした。直接会って「ありがとう」が伝えられなくても、私の吹くトランペットの音で、曽祖母に「ありがとう」の気持ちを伝えようと思った。

ブドウ作りをする祖父を通して、引き継ぐことの偉大さを感じている。そして、祖父を手伝う両親を見て、助け合うことの大切さを感じている。曽祖母は、今年のブドウを食べることはなかった。できれば、一緒に食べたかったなあと思う。それは、もう叶わないけれど、今年のブドウは、私にとっては、特別なブドウだ。

岡山県優良賞

私の祖母

邑久中学校　２年　佐藤　芙季

私には尊敬する祖母がいる。

昔から化粧することが好きだったという祖母は、祖母の娘である私の母がまだ幼かった頃に化粧品販売員になり、四十年以上経った今でも元気に仕事をし続けている。

私は幼い頃から祖母のことが大好きで、祖母の家の裏にある小さなお店に祖母が行くと、私もついて行き、祖母の仕事をする姿をいつまでも熱心に見つめていた。きらきらと輝くたくさんの化粧品の中で、お客さんの要望に合った化粧品を選んでお客さんをきれいにしていく祖母の姿は、いつも生き生きとしている。また、祖母と会話をするお客さんも楽しそうで、「お客さん」ではなく、「友達」みたいだなあと、見ている私は思ってしまう。これは、祖母が「周りの人を笑顔にさせる力」を持っているからだと、私は思っている。

祖母が持つ「周りの人を笑顔にさせる力」とは何かを考えた時、一番に思いついたのは、やっぱり祖母の上手なコミュニケーションの取り方だ。私が祖母に何か話している時、祖母はうなずきながらしっかりと話を聞いてくれたり、
「最近学校で何か楽しかったことあった？」
「このまえあったあのテレビ番組見た？」
などと、祖母の方から色々聞いてくれたりする。また、何と言っても祖母の話は面白い。そのため私は、祖母とおしゃべりするのが大好きだ。

祖母が持つ「周りの人を笑顔にさせる力」には、コミュニケーションの取り方の他に、祖母のポジティブな考え方も関係しているのではないかと、私は思う。例えば、ずっと住んでいた神戸から岡山に引っ越してきた時。当初は、一気に環境が変化したことや、周りに知り合いがほとんどいなかったことなどで戸惑っていたらしい。しかし何事もポジティブにこなしていく祖母は、すぐに近所の人と仲良くなり、周りの環境にも慣れていったのだ。また、二十六歳で自転車、二十七歳でバイクの練習、五十歳で日本エステティシャン協会の試験に合格するなど、色々なことに挑戦するのも、祖母のポジティブな考え方が関係しているのだろう。

ところが、私が小学二年生くらいのときから、祖母の脚がだんだん悪くなっていった。そして、少し歩くのも辛そうにしている祖母と出かける機会が減ってしまった。祖母とのお出かけが減ってしまったこともさみしかったが、何より元気だった祖母が痛みをこらえている姿を見るのは悲しくてしかたがなかった。辛そうな祖母に、私や姉、母、祖父は病院に行くことをすすめ、股関節の病気であることが分かった。病気が分かって少し経ち、祖母は手術をするため入院した。病気で入院したことがなかったという祖母は、やっぱり不安そうだった。そんな祖母の様子に、私は祖母の入院生活を心配しながら見送った。

しかし、祖母の入院生活は私たちの心配などふきとばすようなものだったのだ。「周りの人を笑顔にさせる力」を持つ祖母は、同じ病室に入院していた三人の人と仲良くなり、四人でたくさんおしゃべりしたり、リハビリを兼ねて一緒に病院内のカフェへ行ったりしたらしい。仕切りのカーテンを開けて四人が会話をする、にぎやかな病室に入ったお医者さんからは、

「こんな明るい病室は見たことがない。」

と驚かれたそうだ。

手術も無事終わって退院し、

「入院楽しかった！」

「股関節に金具を入れたから身長が少し伸びたんよ！」

と明るく話す祖母を見て、 私は安心した。そして何よりも、 元気に歩く祖母の姿を見ることができ、とても嬉しかった。

私は昔から祖母としたいことがある。それは一緒に旅行に行くことだ。今はコロナウイルスの流行で行くことができないけれど、行くことができるようになったら、ゆったりと色々な所をめぐってみたい。

「おばあちゃんの幼い頃の夢は？」

「おじいちゃんとはどこで出会ったの？」

たくさんおしゃべりしながら。そして、祖母との楽しい思い出を作りたい。

いつも明るく楽しく元気に仕事をしている私の尊敬する祖母。いつも優しく、周りの人を笑顔にさせる、私の大好きな祖母。そんな祖母がこれからもずっと元気でいてくれること、そして笑顔あふれる思い出を一緒に積み重ねていけることを、私は願っている。

岡山県優良賞

父との握手

長船中学校　３年　林　雄大

僕は父さんのことが苦手です。嫌いかと聞かれると嫌いではないと答えます。父さんの好きなところもたくさんあるからです。いつの頃からか父さんの存在がしんどく感じるようになりました。僕が保育園に通っていた時、父さんは会社の飲み会や仕事で帰りが遅く、僕たちと真逆の生活スタイルのためすれ違っていました。父さんが保育園の送り迎えをしてくれたり僕の運動会を見にきてくれたりしたのも覚えていますが、僕は

「ママがいい。」

といつも泣いて困らせていたのを覚えています。

そんな父さんもどこか旅行へ行く時や遊びにいく時は、抱っこしてくれたり手をつないでくれたりしていました。何かほしいものがあると、すぐに買ってくれるのは父さんで、自分が楽しみたい時は父さんのところへ行っていました。

僕が小学生の時、妹と弟が生まれてお兄ちゃんになりました。この頃から父さんとの会話はどんどん減り、妹や弟ばかりと話すようになりました。妹や弟は、父さんが大好きなので
「パパ大好き。」
と飛び付きにいっては甘えていました。それを僕はどこかうらやましくも感じていました。小さい時からこういう風に父さんと関わっていたら、今でも僕は父さんの事を「大好き」と言えていたのかもしれません。

中学生になると、今度は僕が塾や部活でほとんど家にいなくなりました。一人で過ごす時が増える中、父さんがたまに声をかけてくれることにモヤモヤしていました。父さんに言われたくないと、心の中で叫んでいました。母さんは、僕の態度から父さんと距離をとっているのが分かっていたのか、父さんと言い合いをしそうになると
「いつも言わないのに、何で今言うのよ。」
と僕の気持ちを代弁してくれているようで、僕は気持ちが楽になっていました。

今年の夏、中学生最後の吹奏楽コンクールに出場しました。二年生の夏のコンクールでは金賞だったものの、後一歩というところで県代表になれず悔しい思いをしました。今年から予選と本選が別々で行われるようになり、家族も見に来られる状況になりました。もちろん一番に話したのは母さんです。父さんは仕事でまた来れないのかなと半分諦めていて、素直に「見に来てほしい」という言葉は、照れて言い出せなかったのです。

予選は真備町で行われ、長船からだとかなり時間がかかるのに家族が来てくれました。仕事を休んで見に来てくれた父さんが声をかけてくれたみたいですが、緊張しその声に気付きませんでした。予選を無事通過し、約一週間後に倉敷で行われた本選には、母さんと祖母が見に来てくれました。弟がホール内に入れないので、父さんが休みをとって、妹と弟を家で見てくれました。本選の結果を知ったのはその夜で、母さんは携帯を片手にうろうろして落ち着かない様子でした。結果を知り、
「よく頑張った。お疲れ様。最高の演奏だった。」
と言ってくれ、僕は満足して父さんに報告するのをすっかり忘れていました。

次の日、父さんが仕事から帰ってくると台所の机の上にはたくさんのケーキが並んでいました。今日誰の誕生日でもないのにと不思議に思いながら席に座ると、母さんが父さんに、
「ほら。自分で言いなよ。」
と言いました。すると、父さんが照れくさそうに、けれど僕の目をしっかり見て
「三年間よく頑張ったな。お前が一番頑張ってきたものが結果としてでてよかったな。次は受験だけどとりあえずお疲れさん。」
と右手を出してました。僕は迷わずお父さんの手を握り、
「ありがとう。」
と答えました。その時の僕の心の中にはモヤモヤした気持ちはありませんでした。それよりも父さんに認めてもらえたような気持ちで胸がいっぱいでした。父さんとの握手は保育園の時以来だったので、父さんの手はこんなに大きく温かかったのかと思い出されて僕の手には、父さんの温もりが残っているようでした。

後から母さんに聞いた話では、予選を見に来ていた父さんの目には涙がにじんでいたそうです。ケーキも父さんが仕事の帰りにこっそりと買ってきてくれていたのだと話してくれました。父さんは父さんなりに僕の事を想い考えてくれたんだなあと感じた瞬間でした。父さんへの今までの態度が自分で恥ずかしくなりました。この先も父さんの事を苦手だなと思う僕の態度はすぐに変えられないと思うけど、父さんのことは「大好き」なんだなと心から感じられる自分になれたと思います。

保護者の部

岡山県佳作賞　おばあちゃん入院

行幸小学校　三木　真紀

突然、七月の初め頃に娘の大好きな、おばあちゃん（義母）が、「救急車で運ばれた。」と義父から連絡がありました。

私の母は、私が４歳の時に亡くなったので、私にとって大切な義母、お母さんです。子育てのアドバイスや料理など、いろんな事を教わっています。そして頼りにしています。いつも本当の娘のように声をかけてくれます。

毎週、養父母に会いに行くのが、娘も私も楽しみなんです。三時のおやつタイムは幸せの時間です。

娘に「おばあちゃん、救急車で運ばれて入院したんよ。」と話すと、大泣きしてしまいました。私も一緒に大泣きです。

コロナ感染拡大防止の為、病院にはお見舞いに行けません。洗濯物や着替えも受付での受け渡しになります。おばあちゃんに会えません

七夕が近かったので、「短冊に願い事を書こう。」と娘が言いました。それと手紙を書いて受付で渡してもらおうということになりました。娘の手紙に一部分ですが、「どんなに離れていてもバアバが大好きだよ。」と書いてありました。思いやりのある温かい文に私は感動しました。

義父、おじいちゃんも心配です。おばあちゃんが入院してから元気がなく、娘が「土日だけでも、おじいちゃんと一緒に夕食を食べたい。」とのことで、食卓を一緒に囲んでいます。

その姿を見て、優しい子に育ってくれてありがとうと、思いました。そして、娘の為にも私の為にも一日も早くおばあちゃんが元気に退院できるように信じて待ちたいと思います。

これからは、おじいちゃん、おばあちゃんに私達家族を頼って欲しいと思います。

岡山県佳作賞　「明るい家庭の為に取り組んだ事」

行幸小学校　津々　幸子

我が家には、小学五年生の息子、小学三年生の娘、幼稚園年長の息子の、三人の子供がいます。「明るい家庭づくり」ということで、我が家が明るい家庭になる為に取り組んだ、二つの事について書こうと思います。

一つ目は、「ぬいぐるみの片付け」です。我が家には、大小三十個くらいのぬいぐるみがあって、子供達がごっこ遊びをするのに活躍しているのですが、片付けがなかなかできなくていつも困っていました。誰が片付けるかで喧嘩になったり、三人で片付けるように言うと誰も片付けようとしなかったりして、最終的に叱って片付けさせる事もよくありました。家族全員にとってストレスになっていたので、片付け方をみんなで話し合って決めてみました。

まず、片付けは親も含めて全員参加。順番にサイコロを振って出た目の数だけぬいぐるみを部屋の隅に積みます。部屋の隅にぬいぐるみが全部積めたら完了です。

この方法を始めて二週間くらいは喧嘩をする事もなく平和に片付けられていましたが、時間がかかるのでおそらくみんな面倒になってきて、なんと自主的に片付ける人が出てきたのです。ぬいぐるみを集める人と積む人の二人で片付けたり、時には一人で一分くらいで片付けてくれる事もあります。誰も片付けずに寝る時間がきた時は、声をかけると誰かが片付けてくれます。（誰も片付けないと全員で片付ける事になるので。）同じ人ばかりにならないよう気を付けて声をかけています。

自主的に片付けてくれるようになって一カ月くらいになりますが、今のところいつも問題なく片付くので、この件に関してはストレスが無くなり、よかったです。自分たちの事として考えてもらう為に、最初に全員で話し合って、片付け方を決めたのがよかったのかなと思っています。

二つ目は、「お手伝い」です。夏休みが始まった頃は、頼んだらお手伝いをしてくれていましたが、後半になった今では気が向いた時に気が向いた事しかしてくれなくなりました。そこで、賛否はあると思いますが、お手伝いをしたらゲームを追加で十五分できることにしました。

お手伝いの内容は、私が決めてリストにし、子供はそのリストの中から一日一つ選んでお手伝いをします。リストには玄関掃きや洗濯たたみ等、私がついていなくてもできて、してもらえると助かるお手伝いを中心に書きました。お料理等の、まだ一人でできないお手伝いはまた別の機会に・・・。

当然、この方法ですと、子供達は喜んでお手伝いをしてくれます。私の家事の負担も少し減って、大変ハッピーです。

まだこの方法を始めてから一週間程なので、この先続くかどうかわかりません。学校が始まると平日は時間的に難しくなるので、土日や今後の長期休みに続きをしてみようと思います。

最後に、この作文を書いてみて、普段だとそのままにしてしまう、家庭のちょっとした問題について考える機会になってよかったです。家族のみんなが笑顔で過ごせるよう、今後も生活の中で少し不便に感じる事を見つけたら、自分たちのペースで工夫していきたいと思いました。あと、夏休みの宿題がなかなか出来ない子供達の気持ちも少しわかりました。

岡山県優良賞

家族と協力して

行幸小学校　竹本　美穂

「ねぇ、お姉ちゃんお兄ちゃん、ちょっと話聞いてくれる？」
と私は二人を集めて言いました。
「なっちゃんさぁ、耳瘻孔って言って生まれつき耳の近くに小さな穴が開いてて、その穴を埋める手術を夏休みにしようと思っているんよ。」
なっちゃんは末っ子一年生の娘です。一年生なのでまだ入院には付き添いが必要でコロナ禍なので交代もできません。
「夏休み五日間くらいお母さんがいないんだけど、お姉ちゃんお兄ちゃん、お父さんと協力して家を任せてもいいかな？」
と私は二人に相談をしました。お兄ちゃんは快く
「いいよ。」
と言ってくれました。すると、お姉ちゃんは
「えっ！？　五日間もいないの？」
と少し不満そうに言いました。

お姉ちゃんは五年生、いつも私は何でも相談ができ頼りにしています。なので意外な返事にびっくりしました。いつもだと何でも快く
「いいよ。」
と言ってくれるお姉ちゃん。
「少し話をしよう。」
と私はお姉ちゃんに言いました。
話を聞いていると、どうやら毎日私がしている事をちゃんとできるか不安だったみたいです。私はお姉ちゃんに言いました。
「全部自分でしようと思わなくていいんだよ。皆で協力してしたらいいんだよ。」
その言葉で少しほっとした様子でした。
普段から弱い所を見せず何でも自分で解決する性格のお姉ちゃん。私はお兄ちゃんにも話をしました。
「お姉ちゃん少し頑張り屋な所があるから、困っていたら助けてあげてね。皆で協力して家の事頑張ってしてみて。」
お父さんも慣れない事でいつもと違う生活ですが、子供達二人に
「一緒に頑張ろう。協力しような。」
と声をかけてくれました。
妹の手術も無事終わり退院して家に帰ると、キラキラした笑顔で私達を迎えてくれました。
「皆で協力してちゃんとできたよ。協力したら何でもすぐ終わったよ。」
とお兄ちゃんが言いました。すると、お姉ちゃんが
「協力するのって大事なんだね。これからはお母さんが少しでも困っている事があったら、いつでも言ってね。」
と嬉しい事を言ってくれました。
二人を見守り日々協力してくれたお父さんありがとう。
この入院していた期間、お姉ちゃんを始め家族は協力する事の大切さを知り、数日ですがとても大きく成長したと思います。
家族皆、協力してくれてありがとう。これからも困った時は助け合っていこうね。よろしくね。

岡山県佳作賞

我が家の子育て

行幸小学校　竹原　智子

うちの家族は八人。祖父、祖母、曽祖母、叔父、そして私達家族四人です。子供が生まれる前から一緒に生活し、子供が生まれてからは大家族の中子育てがスタートしました。
子供が一〜二歳の時の事です。食事中にうろうろ歩き回る息子に何度座って食べようと言っても聞きません。「はぁー。」とため息が出そうになりかけた時、祖母がアイスクリームを片手に子供に一口食べさせては、小さなおにぎりを口にパクッ。息子は何かに夢中になりながら知らず知らずの内に食事を済ませました。私は、驚きと共に何だか片肘張らずに子育てする事を学んだ気がしました。大勢の中での子育ては大変な事もありましたが、いろんな思いや考えの中で成長していく子供達に感心させられる事もたくさんありました。
一人で子育てしてきたのではないので、自信を持って母親ですとはなかなか思えない時期もありました。けれど、「親だって０からスタート。困って当然、分からなくて当たり前、一緒に大き

くなれば良し。」という家族の言葉は、私の子育てを大きく変えました。今でも私の座右の銘となり心に残っています。

大家族で過ごした十三年間の月日は、私にとって何事にも代えられない宝物です。これから思春期を迎える子供達。いろんな人達の思いや知識と共に成長している事を忘れずにさまざまな思い、考えがある事を知りその中で自分にとって何が必要か学んで欲しいと願います。

岡山県優良賞

夏の落とし物

行幸小学校　野田　真美

「あと何日したら、このお部屋から出られるの。」

この夏、帰省先で三男がコロナにかかってしまった。テレビのない部屋に隔離された三男は、テレビやゲームがないことより、早くみんなと遊びたくて仕方がないようだった。兄やいとこの楽しそうな笑い声に、いいなあと聞き耳を立てたり、時には

「楽しそうにせんでって言ってきて。」

と怒ったり。元気になってからは、しきりに最初の言葉を聞いてきた。

律儀な性格なので

「お医者さんに十日間と言われているよ。」

と伝えると、毎朝あと何日か確認し、宿題も一日二回決まった時間取り組み、ごほうびのゲームも手袋と消毒をしてきっちりこなしていたけれど、とにかく時間がたたない。そこで、久しぶりに読み聞かせをすることにした。いとこの持っていた、分厚い児童書しかなく、

「こんなの絵が少ないし、おもしろくないから嫌。」

と読む前ははまってくれるか心配な反応だった。が、読み始めるとケラケラ笑ったり、

「もう一回ここ読んで。」

とおねだりしたり、しっかり物語の世界に入って楽しんでくれた。また、絵本を読んでいた頃にはできなかった、

「続きはまた明日ね。」

で我慢し、続きを楽しみに待てるようになったことも、新たな発見だった。他にも図形パズルにああでもないこうでもないとじっくり挑戦し、気付けば一時間以上熱中していたり、ラジオ体操の後つけっぱなしのラジオから知ってる曲が流れて喜んだりと、アナログな隔離生活の中でも楽しみを見つけて、ゆったりとした時間のよさを感じ取ることができた。

また、食事についても気付くことがあった。三男に配膳した後、ずっと傍に付いてあげられず、別室で食べる兄たちとの間を行き来しながら様子をみることが多かった。すると、表情もとぼしく、早食いになってしまい、

「おいしいけど、一人だからもういらない。」

とおかわりもあまりしなくなったのだ。普段も段取りが悪く、子どもだけで食べさせ始め、私は後から食卓につくことが多いのだが、ゆっくり会話しながら食べる時間を取れていなかったことを反省した。隔離期間が終わり、迎えに来た父親も一緒に家族みんなで食べた時の、三男のあのうれしそうな顔が忘れられない。

隔離生活は大変だったけれど、 子どもとじっくり向き合うこと、家族そろってご飯を食べること。そんな当たり前の日常がどんなに幸せで大切なことかを気づかされた夏休みだった。

瀬戸内市優良賞〔小学生の部・中学生の部〕受賞者一覧

題名	所属	氏名
「おかえり」のかず	牛窓東小学校　１年	藤井晴大
わたしの　なまえ	今城小学校　１年	坪井鈴佳
ぼくの　ママ	今城小学校　２年	大島　岳
おじいちゃんのまほうのやさい	行幸小学校　２年	林　美織菜
わたしは本当にさみしいのかな	邑久小学校　３年	井上葉月
お母さんの　入いん	今城小学校　３年	原田真仁
ひーちゃん	邑久小学校　４年	安藤茜音
お父さん、いつもありがとう	今城小学校　４年	的場美弥
なつみと真夏の大ぼうけん	邑久小学校　５年	北野くるみ
応えんを力にかえて	邑久小学校　５年	畑　咲都
私とおじいちゃん	邑久小学校　６年	玉垣柚衣
父とぼくとテニス	邑久小学校　６年	森川　楓
夏祭りに込める思い	長船中学校　１年	新田朔久
留守番	長船中学校　１年	厚木優来
父と、母へ	長船中学校　２年	酒井佑月
私と大事な家族	長船中学校　２年	望月和奏
私と父	邑久中学校　３年	前田和瑚
私の妹	長船中学校　３年	平尾優奈

瀬戸内市佳作賞〔小学生の部・中学生の部〕受賞者一覧

題名	所属	氏名
せばんごう十七ばん	牛窓西小学校　１年	宗髙　輝
ぼくのおにいちゃん	牛窓北小学校　１年	祇園拓実
ちいさい　おばあちゃん	邑久小学校　１年	安井　凛
がんばるかぞくのすがたをみて	邑久小学校　１年	角田雄星
わたしのまま	邑久小学校　１年	金平悠希
わたしのできること	邑久小学校　１年	那須柚希
げんきなかぞく	裳掛小学校　１年	黒井友貴
おばあちゃんちの　ねこ	国府小学校　１年	嵯峨山夕稀
ぼくのおしごと	国府小学校　１年	佐々井颯大
なつやすみのおてつだい	行幸小学校　１年	野﨑　茜
わたしのおじいちゃん	牛窓東小学校　２年	坂口　奏
パワフル　ひいじいちゃん	牛窓北小学校　２年	松本稜央
わたしのかっこいいおばあちゃん	邑久小学校　２年	入田心音
ぼくにまかせて　いえのこと	邑久小学校　２年	田村伊織
だいすきな　わたしの妹	邑久小学校　２年	藤山凛花
ぼくの家ぞく	裳掛小学校　２年	岡元陽輝
ぼくのおとうと	美和小学校　２年	小谷歩夢
だいすきなマックス	国府小学校　２年	柴原堆我
お母さんのにゅういん	行幸小学校　２年	竹原悠真
お空のご先祖様	牛窓東小学校　３年	藤井咲帆
ぼくのママの仕事	牛窓西小学校　３年	畑中太白
家族で楽しいおみそ作り	牛窓北小学校　３年	真木彩花
かぞくの　いいところ	邑久小学校　３年	川﨑　照
ぼくの家族	裳掛小学校　３年	井上隼輔
家族のために	美和小学校　３年	黒原志和

題名	所属	氏名
大すきな、ななちゃん	国府小学校　３年	播本弥耶
わたしの家族	国府小学校　３年	井町優菜
おばあちゃんの教える料理	行幸小学校　３年	松井美咲
私とおじいさん	行幸小学校　３年	岸本あや菜
ひいじいとすごした日々	牛窓東小学校　４年	岡﨑咲和
家族と過ごした夏休み	牛窓西小学校　４年	山本直輝
家族がふえた	牛窓北小学校　４年	山田　蒼
最後のおくり物	邑久小学校　４年	寺町るん
大好きな妹	邑久小学校　４年	猪野日万莉
ぼくのお母さんの九百三十分	美和小学校　４年	西山翔太
特別なおはかまいり	国府小学校　４年	内海橙太
ぼくと家族とサッカーと	国府小学校　４年	水田　迅
わが家の夏の挑戦	行幸小学校　４年	播本　花
わたしのお兄ちゃん	行幸小学校　４年	竹本汐里
お父さんのからあげ	牛窓東小学校　５年	森　愛優菜
ねこのあずかりボランティア	牛窓西小学校　５年	片島咲良
目標は、お父さん	牛窓北小学校　５年	安良田悠大
タロウ	今城小学校　５年	阿部華愛
子ねことの出会い	裳掛小学校　５年	坂本翔真
わたしのいとこ	美和小学校　５年	佐藤由麻
弟とお祭り	国府小学校　５年	目賀稀乃華
西日本一の山を登って	国府小学校　５年	野村史起
家族と過ごす大切な時間	行幸小学校　５年	安達かおる
夏のステイホーム	行幸小学校　５年	檜山太陽
ぼくのひいおばあちゃん	牛窓東小学校　６年	坂口　思
わが家のきゅうりくん	牛窓西小学校　６年	鳴坂百華
おばあちゃんが教えてくれた事	牛窓北小学校　６年	木藤梨心
おばあちゃんの　ゆい言！？	邑久小学校　６年	川野颯平
アルバイト	邑久小学校　６年	井上晴愛
支えてくれる家族	今城小学校　６年	橋本佳歩
僕の決意	美和小学校　６年	望月遙真
ある日のカメムシ事件	国府小学校　６年	金田颯太
がんばる家族のすがたを見て	行幸小学校　６年	花澤希奈
お母さんの入院	行幸小学校　６年	竹原莉子
夏休みの給食係	牛窓中学校　１年	真木心暖
家族と乗り越えた骨折事件	邑久中学校　１年	柴田亜由果
私の家族	邑久中学校　１年	佐々井葉月
私の宇宙一自慢の家族	邑久中学校　１年	小野田音夢
農業が大好きになった日の思い出	邑久中学校　１年	阿部桜華
私の家族	牛窓中学校　２年	岡本優奈
父の偉大さ	邑久中学校　２年	根岸杏子
家族の存在	邑久中学校　２年	上村彩寧
がんばる家族の姿を見て	邑久中学校　２年	日名静香
母という存在	長船中学校　２年	大森琴巴
コロナ禍での生活	牛窓中学校　３年	小竹稀羽
あの夏を忘れない	邑久中学校　３年	神谷凪穂
家族のみんながんばっている事	邑久中学校　３年	杉田優希
父と私の言葉の架け橋	邑久中学校　３年	平田優奈
久しぶりに揃った	長船中学校　３年	石井隆誠

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集
（瀬戸内市優秀賞受賞作品）

令和５年２月発行

編集発行
瀬戸内市教育委員会
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会
〒７０１－４３９２　瀬戸内市牛窓町牛窓４９１１
瀬戸内市教育委員会社会教育課内